服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

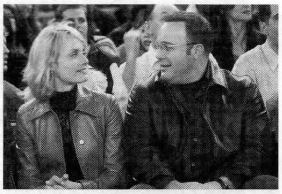
FROM FRANCE
中野香織㊻

〈英国貴族〉の実態は

現代英国貴族ですか……。ウッディ・アレンの「マッチポイント」を見てないままに言うのももどかしいんですが、現代英国貴族のイメージが、くっきりと絞れません。

世襲の爵位をもつ貴族のなかには、税金が払えなくてお屋敷の管理を「ナショナル・トラスト」みたいな財団にゆだね、家族はその隅っこで細々と暮らしているっていうケースが少なくない。20年ほど前、第9代バッキンガム伯爵が庭師として死亡したのは有名な話だし。この手の世襲貴族は「ヌーヴォー・ポープル（新ビンボー階級）」とも呼ばれるようです。

国家に貢献してナイト爵（一代貴族）に叙せられた人の中には、サー・エルトン・ジョンとか、サー・デイヴィッド・ベッカムとか、なんだかこいつらが「貴族」っていっても……な人たちもたくさんいるし。「投資会社を経営し、オペラ劇場に年間予約席を持ち、田舎に荘園があり、名門テニスクラブの会員で……」って、むしろヌーヴォー・リッシュ（成金さん）かのイメージ。もちろんこんな貴族も少しはいるのかもしれないけど、アメリカ人が描く幻想のイギリス貴族って感じもします。



「最後の恋のはじめ方」新みゆき座にて上映中

オブジェ制作＝井上陽子

アメリカ人の描く「貴族」像にはやはり富とセレブ感が不可欠のようですね。現代アメリカ貴族像があるとすれば、たとえば「最後の恋のはじめ方」に出てくるアレグラ（アンバー・ヴァレッタ）なんてその典型かも。親から譲られた莫大な財産があり、制服男を数人従えて自家用ヨットに乗り、手にはエルメスの白いバーキン……。資産の一部を新しい才能に投資しようとするのも、アメリカ版「ノーブレス・オブリージュ（高貴なる者の義務）」？

それはともかく、この映画で予期せぬ収穫だったのは、このセレブ女性に身分違いの恋をするケヴィン・ジェームズ！　はじめは暑苦しいデブにしか見えなかったのに、〈デート・ドクター〉ことウィル・スミスの指南を受けてあれよあれよという間にセクシーで自信にあふれたいい男に変貌。これって、ウィル・スミス＝ヒギンズ教授、ケヴィン・ジェームズ＝イライザの現代男性版「マイ・フェア・レディ」じゃん！

「マイ・フェア・レディ」ってそういえば、話し方と立ち居振る舞いだけで「貴族らしさ」を獲得するという、貴族の実態があやふやな国だからこそありえた話だった。

それにしても、あこがれや敬意をこめて熱い視線を注がれる「貴族」がもはやイギリスにはめったに見当たらず、その美化された幻影をアメリカ人が育てている…とすればそれは喜ぶべきなのか憂うべきなのか。